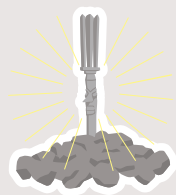


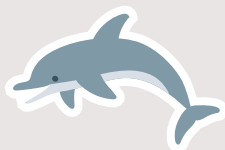


霧島錦江湾国立公園のストーリーを使って
地域の魅力を伝えよう



～ストーリーブック活用のヒントになる事例集～

National
Parks
of Japan



霧島錦江湾国立公園では令和6年度に、国立公園ならではの価値や魅力を、自然と人々のストーリーとして明確化した「霧島錦江湾国立公園ストーリーブック」を作成しました。国立公園全体を4つの地域（霧島地域、桜島錦江湾奥地域、指宿地域、佐多地域）に分け、それぞれの地域ごとのストーリーブックと、「食のストーリー」があります。これらのストーリーを地域の皆様と共有し、それぞれの立場で活用、情報発信していただくことで、霧島錦江湾国立公園のブランド力向上が期待されます。

この事例集では、国内の他地域において、インタプリテーション計画あるいは地域自然と人のつながりを示したストーリーを地域のブランディング活動に活用している事例をまとめました。これらの事例を参考にしてストーリーブックを活用し、霧島錦江湾国立公園の魅力を共に伝えていきましょう。

- P2 1. ストーリー × ツアー …… 長崎県雲仙市
 P5 2. ストーリー × 人材育成 …… 長崎県雲仙市、沖縄県石垣市平久保半島、栃木県那須町
 P9 3. ストーリー × 商品開発 …… 東京都高尾ビジターセンター
 P11 4. ストーリー × 解説板 …… アメリカ合衆国
 P14 5. ストーリー × 学校教育 …… 埼玉県カネバ緑の森博物館
 P17 6. ストーリー × 移住 …… 栃木県那須町

ストーリー

その土地の自然や歴史、文化、人のくらしのつながり（因果関係）を一つの物語としてまとめたもの。インタプリテーションの重要な要素として、全体計画の中に「ストーリー」がまとめられる。

インタプリテーション

自然や歴史・文化の持つ意味や価値を来訪者にわかりやすく伝え、来訪者が自分ごととして感じ地域とつながるための教育的なコミュニケーション活動。資源の保全や観光の振興にも重要な役割を果たす。

インタプリテーション 全体計画

自然公園や博物館、観光地などで、地域の魅力や価値を来訪者へ効果的に伝えるための包括的な戦略のこと。1つの冊子としてまとめられる。※本冊子では「全体計画」と呼ぶ。

霧島錦江湾国立公園ストーリーブックはこちらから



霧島地域



桜島錦江湾奥地域



指宿地域



佐多地域



食のストーリー

1. ストーリー × ツアー

ストーリーが活用されたツアーとその土地でしか味わえない体験

長崎県雲仙市
 （一般社団法人雲仙観光局）

長崎県雲仙市は、長崎県東部に位置し、市域面積のうち約4割が雲仙天草国立公園に指定されています。雲仙岳の火山景観と雲仙温泉を中心として、島原半島の豊かな自然と農水産業、歴史文化をあわせ持っています。

日本の国立公園の中では、先駆けて令和4年度に「雲仙温泉地区インタプリテーション全体計画」が作成され、この計画に含まれるストーリーが活用されています。

活用されているストーリー

こうじろくじ

神代小路の歴史が
 地元の人の手で残されている。

歴史・文化を体験できるツアー

雲仙市内の国見エリアは、観光地としてはあまり注目されてきませんでした。しかし、全体計画が作成され食や文化、歴史の潜在的な価値が引き出されたことをきっかけに、体験型の有料コンテンツが誕生しました。

その1つが月に数回実施される「国見神代小路ガイドツアー」です。国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された地区をガイドと一緒に巡り、国見の伝統的な美しい景観を味わうことができます。

活用されているストーリー

雲仙温泉街は
 火山や地獄と共生している。

初めて開催された爛付けツアーのチラシ

国立公園「雲仙」指定九十周年記念事業
 エコな給湯器
爛付けツアー
 自然の地熱を利用した給湯設備「爛付け給湯」や断熱調査などに活用されるまでに自然のエコ給湯器！そんな爛付けを体験するサステナブルガイドツアーです！

集合	50周年広場
日時	11:18 土・11:25 土 2:14 土・2:18 土・2:15 土・2:22 土
10:00	50周年広場 集合
10:05	雲仙地獄をガイドと一緒に散策
12:00	解散

参加費 参加費無料・10名限定
 当日はガイドと共に歩いて雲仙地獄周辺を周遊するツアーとなります。履き変えた運動靴をお越しください。

00000

雲仙地獄の地熱を利用してお酒や食材を温めることのできるユニークなツアーを2025年1～2月に雲仙市が企画し実施しました。ツアーは始めにガイドと共に雲仙地獄周辺を散策します。次に地熱を利用した給湯設備「爛付け」の仕組みについて学び、爛付け体験に入ります。これまで計15回開催し、各回約5名の参加があります。火山の恵みを活かした独特な体験は、参加者に地域の特色をわかりやすく伝え満足度を高めています。



一般社団法人 雲仙観光局

旧家を案内している様子

活用されているストーリー

動き続ける雲仙地獄が、地球の躍動・鼓動を伝えてくれる。

九州の各地を巡るクルーズトレイン「ななつ星in九州」のいくつかあるプランに、九州旅客鉄道(株)クルーズトレイン本部との連携によって雲仙コース(3泊4日)が組まれることとなりました。線路や停車駅がないにも関わらず、バスを利用し、2~3日目に雲仙温泉地区に滞在します。1泊する中で、寝転がって地熱を体験できます。ストーリーに沿った体験は、九州におけるクルーズトレインのプラン内でナンバーワンの評価を獲得し、雲仙の新たな魅力を全国・世界に発信する大きなきっかけとなりました。このツアーは4年も続き、年に23回も実施する中で各回約18名の参加があります。これまで延べ約1,850名が参加し、2回、3回とリピートしている方も獲得できています。

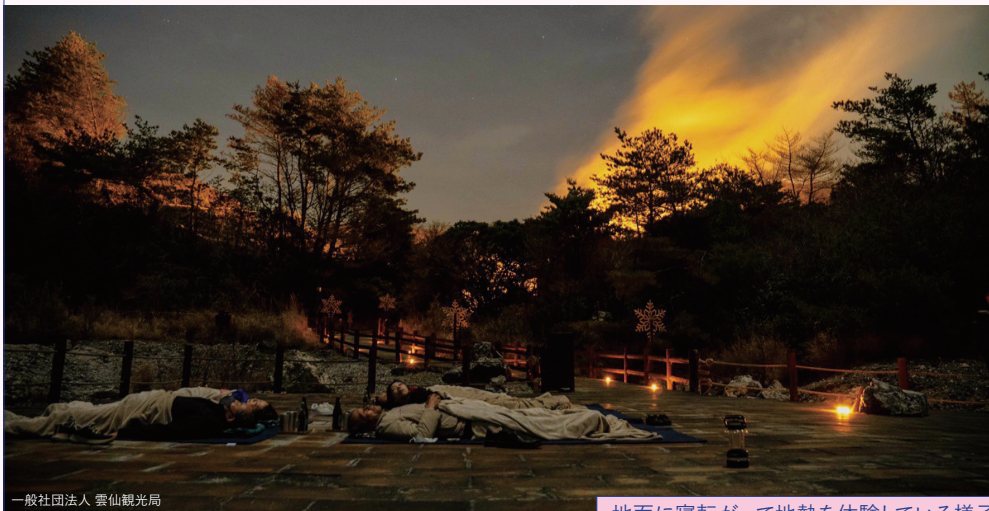


火を囲んだのんびりティータイムの様子

一般社団法人 雲仙観光局

このツアーの成功の背景には、ガイドの方達を集め、ストーリー集をもとに雲仙における価値やガイドのポイントについて丁寧に打合せを重ねたことがあります。さらに、ガイドには手元でストーリーを確認しながら案内をしてもらっています。

ストーリーを元に同じ情報源で関係者が連携したことで、高評価の体験を実現することへとつながっています。



地面に寝転がって地熱を体験している様子

一般社団法人 雲仙観光局

食事を楽しむ国内外からの参加者



活用されているストーリー

一般社団法人 雲仙観光局

自然を活かした優雅な長期滞在が「ハイカラ文化」を生み、今尚その片鱗を見ることができる。

かつての栄えた時代の体験を再現したレストラン

明治から昭和初期にかけて雲仙温泉街は外国人の避暑地として栄えました。当時、温泉ならではの湯けむりや匂いを楽しみながら食事をする野外レストランが人気でした。その当時の様子を再現し、雲仙ならではの高付加価値体験型のアウトドアアクティビティとして、現代版の天幕レストランが商品化されました。

このアクティビティは、地域の宿泊施設や星付きのレストランオーナーシェフ、ソムリエ、日本茶インストラクター、装飾のクリエイターといった地元の人材でチームを組みました。ストーリーを基にして、参加者や季節などを踏まえてその時々で特別な空間を演出しています。これまで10回の開催があり、外国人旅行者も参加しています。国内外を通して高い満足度を提供でき、雲仙のブランディングに貢献しています。

ツアー以外にも、地域の特色を活かした商品が開発されています。



専門的なスタッフが多数関わっている

一般社団法人 雲仙観光局

明治の料理人が西洋の来訪者の口に合うよう、カツ丼の味つけをデミグラスソースで洋風にアレンジしたところ、人気のメニューとなる「洋風丼」が生まれました。

それが「雲仙ハヤシ」の始まりです。その後、人気旅館の雲仙福田屋が「雲仙ハイカラハヤシ」として商品化します。商品パッケージやポップには、ストーリー内の「ハイカラ文化」が活用され販売戦略に貢献しました。



雲仙福田屋のシェフと「雲仙ハイカラハヤシ」

一般社団法人 雲仙観光局

雲仙ハヤシ

商品パッケージやポップには、ストーリー内の「ハイカラ文化」が活用され販売戦略に貢献しました。

地域の価値を伝えるストーリーの活用と 一体感のあるおもてなし

長崎県雲仙市
(一般社団法人雲仙観光局)

雲仙市ではストーリーを活用した「超おもてなし研修」が行われました。地域の魅力や価値を伝えることを目的とした、一般的な接客研修から一歩踏み込んだ研修です。雲仙温泉地区の魅力や価値を伝えたいのであれば誰でも参加することができ、参加者の立場やニーズによって必要な内容を選択できるコースが用意されました。令和4年9月から翌年3月までに計10回の研修が開催され、多様な業種に関わる立場の人が約120名参加しています。

「接客スタッフ入門編」

対象 各施設の接客スタッフ、交通関係事業者、観光施設勤務の方、料理人、飲食関係のアルバイト

ゴール 雲仙の魅力や価値を再確認し、観光客に伝えられるようになる。

「接客スタッフ応用編」

対象 特に接客が核となる方

ゴール 自身の業務の中で雲仙の良さを活かし、伝えられるようになり、好事例についての情報交換をする。

「超ディレクター研修」

対象 ガイド・インタープリターのディレクションや、コンテンツ造成の支援などを行う方

ゴール 自身の事業で雲仙の良さを活かした、伝えられるコンテンツやサービスを考えられるようになる。例えば、雲仙の良さを活かした宿泊プランの造成、チェックイン時やお食事提供時のご案内、体験プログラムの造成、モデルコースの開発、お土産やオリジナルグッズの開発、WEBの磨き上げ。

「超ガイド・インタープリター研修」

対象 雲仙をフィールドにガイド・インタープリターを業務や生業にしたい方

ゴール ストーリーに基づいた雲仙温泉ならではの価値を来訪者と共有するため、行政や地域住民、観光関係者といった異なる立場を意識して、取り組み方を考えられるようになる。

「超プロデューサー研修」

対象 雲仙を活かした事業をプロデュースしたい方

ゴール 雲仙を活かした各事業をプロデュースできるようになる。パンフレットやWEB、展示や解説板等の間接的に伝えるメディアの考え方や作り方を身につける。

これらの研修以外にも雲仙温泉街にある全ての宿泊施設を対象とした出前講座も実施されています。

地域関係者の立場やニーズに合わせた研修によって、ストーリーへの理解と共感を広げることで、地域一体となったストーリーの活用につながっていききました。

全世帯での活用を目指したストーリー

沖縄県石垣市平久保半島
(平久保半島自治協議会)

沖縄県石垣島の北東部に伸びる平久保半島は、半島の大半が西表石垣国立公園に指定され、豊かな自然と美しい風景を味わうことができます。175世帯、約500名が暮らすこの地域では、令和6年度に「石垣島平久保半島インタープリテーション全体計画」がまとめられ、ストーリーの活用が地域に根ざすことを目指しています。

地域住民のために設けたストーリーを体験する機会

地 域でストーリーの理解を深めるため、令和8年2月に地域住民を対象としたツアーが実施されました。ツアーのコースは地元の方がふだん行くことが難しい場所が選ばれました。

全世帯への配布

ス トーリーは地域住民の声を集めて作成されました。活用に向けて令和8年度に全世帯分に配布される予定です。

多様な業種の関わりにより、 引き上げられるストーリー活用の解像度

栃木県那須町
(一般社団法人那須町観光協会)

那須町は栃木県の北部に位置し、町域の約4割が日光国立公園に指定されています。那須岳山麓に広がり、那須高原と歴史ある那須温泉郷をはじめ、別荘地としての歩みと観光と酪農、農業が共存しています。令和6年度に「那須地域インタープリテーション全体計画」が作成され、地域で活用されています。

地 域の魅力や価値を伝えられるようになることを目的とした研修会が、那須町でも4回実施されました。「超おもてなし研修」と題し、ストーリーを伝える基本を体験的に学ぶ「インタープリテーション研修」(2回実施、計76名参加)と、その学びを土台に応用編として「プログラム立案研修」(全2回20名参加)が行われました。なお「プログラム立案研修」は、ストーリーを形にする方法に焦点が当てられました。

当日は異なった業種の人々がチームを

組み、那須のストーリー集の中から扱うストーリーを選択して活用のアイデアを立案しました。



「インタープリテーション研修」の様子

【研修参加者の業種】

宿泊事業者、登山ガイド、自転車ガイド、インタープリター、動物園、水族館、牧場、キャリアコンサルタント、観光協会、那須町役場

研修を通して、具体的なストーリーの活用案が誕生しました。

1)開拓の歴史を語るチーズ

活用されているストーリー

那須の風土を形づくったものは2つの開拓であり、いまなお西洋的な雰囲気や、他者を受け入れるオープンマインドとして、脈々と受け継がれている。

生きものを扱う動物園と水族館、牧場が連携し、那須の開拓時代の人々の努力によって地域の特産となった牛乳を使ったチーズがオリジナル商品として企画されました。2026年3月現時点の販売は未定ですが、商品の売り上げの一部は希少な生きものの保全のために活用し、那須地域の自然を守る取り組みにつなげることを想定しています。



開発されたオリジナルのチーズ

2)ストーリーに沿って
組み合わせさせた自然体験ツアー

活用されているストーリー

山頂から山麓までの多彩な那須の自然体験には、紡がれてきた自然と人の物語が息づいている

「大人の休息タイム～雪と樹と火との時間～」と名付けられたツアーは、地域で体験できる複数の自然体験が組み合わせられています。茶臼岳の麓にある那須平成の森を舞台に、スノーシューを装着して雪を楽しむ「雪の時間」、ツリークライミングを通して樹木のたくましさや森の生きものの視線を楽しむ「樹の時間」、那須のブランドチーズを使ったワイルドなたき火ランチを楽しむ「火の時間」という3つの体験で構成され、令和8年3月に企画されました。

3)那須の風景を見せるTシャツ

活用されているストーリー

那須らしい風景は、かつての自然と人々の暮らしの葛藤の中で紡がれて来た物語を今に伝える奇跡の風景である。

ストーリーを反映したオリジナルTシャツ「那須Tee」は、全体計画策定のワークショップに参加し、ストーリーへの理解もある、国立公園オフィシャルパートナーの(株)NPSが作成しました。那須高原は、那須岳を起源とした火山

がつくり出しました。古くから牧畜が盛んで、今は途絶えた日本在来馬「那須駒」の放牧地だったことでも知られています。那須高原の見どころでもあるツツジは火山性の土壌を好むことに加え、放牧されていた馬が毒を持つツツジを食べずに避けたことで、一大群生地としてこの地に残りました。このTシャツは、那須高原ビジターセンターと那須平成の森で2024年7月より販売され、2026年2月現在で2施設合わせて約90着が購入されています。購入者からは那須らしさが伝わるデザインとして高い評価が寄せられています。

ストーリーを反映したオリジナルTシャツ



株式会社 National Park Solutions

「友ト」は一般社団法人那須町観光協会(登録DMO)が進める「未来の人財育成プロジェクト」との連携事業で実施され、総合的な学習の時間に那須町の小学校6年生32名を対象に行われました。児童は9つのグループに分かれ、それぞれに多様な業種のアドバイザーが伴走する体制のもと、ストーリーについて説明を受け、地域の魅力をより多くの人に伝えるための取り組みを考えました。

【関わったアドバイザー】

ホテル、国立公園インタープリター、ジェラート店、那須町観光協会、牧場、アウトドアガイド、貸別荘、道の駅

半年間にわたり児童が自分たちで調べ、まとめる過程で、アドバイザーは毎月1回学校を訪問して進捗を確認し、その都度必要なレクチャーを行いました。特に、素材の紹介にとどまらず、その背景にあるストーリーが表現されているかを重視してアドバイスされました。小学生にとっては難易度の高い内容であったにも関わらず、児童は発表会までやり遂げ、保護者や学校関係者にもストーリーを知ってもらう良い機会となりました。

ストーリーから生まれる商品が促す、 地域ならではの体験

東京都高尾ビジターセンター
(株式会社 自然教育研究センター)

東京都八王子市にある高尾山は、明治の森高尾国定公園に指定されています。標高599mの山頂まで登山道が整備されており歩きやすく、四季を通してさまざまな動植物に出会えます。平成30年度に指定管理者である株式会社自然教育研究センターにより、高尾ビジターセンターインタープリテーション全体計画がつくられ、来訪者へ提供されるサービスにストーリーが活用されています。

活用されているストーリー

高尾山の豊かな自然が、
あなたと四季折々の可憐な花とを
巡り出会わせる

高尾山に訪れる人の中には、植物を観察することを目的にしている人が多くいます。山頂に位置する高尾ビジターセンターの窓口には、来訪者が撮った写真を見せながら「この花は何ですか?」「○○の花はいつ、どこで見られますか?」といった、開花植物に関する質問が1年中寄せられています。

さらに、全体計画の中には、高尾山を訪れた人に体験してほしいことが「来訪者に望まれる体験」として記載されています。その1つに「季節を変えて訪れて、動植物から季節の移り変わり、異なる気候帯において形づくられる植生を楽しんでほしい。」という項目があります。来訪者の植物に対する関心を捉えつつ、来訪者を「望まれる体験」へと促すことができるよう、商品の開発が進められました。



開発された手ぬぐい：四季折々の高尾山の花がデザインされている

来訪者の関心に寄り添い、来訪者に望む体験の促し

すべての花を見つけた人が押せるコンプリート印



商品に適したストーリーの整理

商品を形にしていく過程では、商品を開発する上での意図に沿って、高尾山のストーリーが伝わるよう、全体計画に示されたストーリーを、商品として無理なく伝えられる範囲に落とし込むことが重要視されました。そこで、メインストーリーの1つである「高尾山は、千年以上も前よりそれぞれの時代の人々の想いによって守られ続け、世界的に見ても大都市である東京の都心部に最も近い登山ができる山でありながら、今もなお日本有数の生物多様性を残している」に内在されるものから、「暖温帯と冷温帯の境に位置することや尾根や沢などの地形的な特徴、人間の土地利用などが、狭い範囲に多様な植生をつくりだし、数多くの植物を育む」に焦点が当てられ、商品のデザインの拠り所となるストーリーとして「高尾山の豊かな自然が、あなたと四季折々の可憐な花とを巡り出会わせる」が抽出されました。

商品を介して体験を促す仕掛け

抽出されたストーリーを商品として表現する手段として、登山でも活用でき、四季折々の花々を表現できることから、手ぬぐいを候補に開発が進められました。手ぬぐいには高尾山を代表する花11種を開花する順番に配置し、植物を通して季節の移ろいを感じられる工夫が施されました。

開発された手ぬぐいは「高尾山 花めぐり手ぬぐい」と名付けられ、令和5年4月に販売が開始されました。販売開始日は購入のための待機列ができるほど注目を集め、令和8年1月末までに約4700枚が購入されています。購入者からは、「次の時期はどんな花が見られますか?」といった質問が寄せられるようになり、「これから花に詳しくなりたいから購入しました。」という声も聞かれました。さらに、日付印を集めることを楽しみに来山する来訪者も見られ、11種すべてに日付印を押したあと、2周目に挑戦する人も現れています。

購入者の高い満足度

その場所の意味や価値を語る解説板

アメリカ合衆国

アメリカでは、国立公園をはじめ、さまざまな自然地や観光地において、ストーリーを通した来訪者体験が提供されています。ガイドが来訪者にその場所の意味や価値を伝えたり、ストーリーを伝える商品が販売されたりしているほか、展示や解説板を使った先進的な事例も多くみられます。

常に人が対応することができない場所では、解説板や看板がその代わりを果たすことができます。人が直接伝える場合と異なり、相手の年齢や理解度に合わせて柔軟に対応することはできませんが、365日24時間多くの人に伝えることのできるツールであると言えます。

解説板の中には、扱う資源の情報や知識のみが書かれているタイプのものもありますが、ストーリーを用いて書かれていることが、読んだ人の心に残り、感動体験へとつながるものもあります。

現在、マンザナー国立歴史公園と
なっている場所は、かつて第二次世界大戦中にアメリカ政府が日本人移民と日系アメリカ人を収容した収容所がありました。

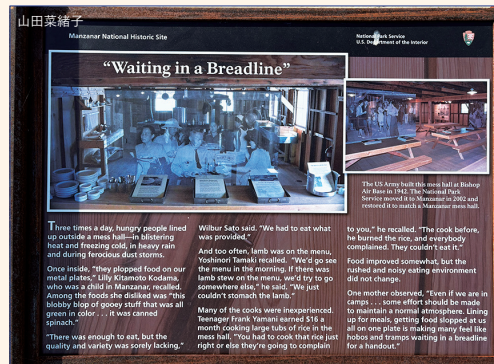
ある日を境に平穏な日々からプライバシーもなく、埃まみれの環境での暮らしを強いられました。解説板では、劣悪な環境ながらもたくましく生きる姿が語られ、秩序を保つ努力、日本文化の継承、学校運営のような暮らしぶりが伝わり、解説板を見た人も歴史を体験しやすくなっています。

感動体験を生むストーリー

山田菜緒子



事例写真1 食堂棟が復元され、食堂についての解説板がある。この食堂で何が起こっていたのか、当時の人々の生活がわかり、それが追体験となる。



事例写真2 過酷な環境の中、空腹に耐え、美味しいとは言えない食事をとる。そのような厳しい生活がわかることで、見ている人が自己投影できる。

ガイドによる案内を受けずに、解説板だけを見て回っても、ここで起きていたことを理解し、自分の生活と重ねて受け止めることができます。これが単に歴史の情報を提供するだけのものではあればこうした体験にはつながりにくいでしょう。ストーリーとして語られているからこそ、見る人の感情に訴えることができます。

ワシントン州シアトル・ウォーターフロントは、海沿いに約3km続く歴史のある地域です。この土地の形成に自然や人の手がどのように加わってきたか、そこに誰が暮らし働いたか、どのような出来事が起こり、今も続く活動は何か、歩いているだけでは見えないこうした歴史や意味を、地域の各所に設置された解説板が来訪者に伝えています。これはシアトル市を含む8つの官民団体による協同事業で、情報収集からストーリーの整理、

地域全体で伝えるストーリー

解説板のデザインに至るまで、検討を重ねて進められました。

【明らかになる継承したい歴史】

チームが特に重点を置いたのは、ウォーターフロントに影響を与えた多くのコミュニティのストーリーを伝えること、特に最初の居住者であった部族のストーリーを際立たせることでした。

【目に止まりやすく雰囲気邪魔しない工夫】

解説板は長期間の設置を目指し、自然景観を損なわず、周りの都市デザインとの視覚的な統一感を生み出すようにつくられています。ウォーターフロント公園にある解説板の多くは、花壇やベンチ、手すりなどに取り付けられていて、人が滞在するポイントが選ばれています。それぞれのストーリーは設置場所ごとに完結していて、デザインは画像が中心となっています。テキストは主に写真や図面のキャプションとして構成され、読みやすく工夫されています。



人通りの多い場所に設置された先住民についての解説板

里山と地域の学校を結ぶストーリー

埼玉県カネバ緑の森博物館
(株式会社 自然教育研究センター)

埼玉県と東京都にまたがる、東西約11km、南北約4kmの狭山丘陵の一角にある「カネバ緑の森博物館」は、里山の自然そのものを展示物としたフィールドミュージアムです。動植物の豊かな雑木林や湿地、田んぼやため池などでは、かつて人々の営みがあり、散策をすると自然だけではなく文化や歴史も垣間見えます。丘陵を愛する地域の人々の活動によって近代的な都市開発から守られてきたこの場所をいつまでも残すために、ストーリーが活用されています。

緑の森博物館での体験を一連の授業として取り入れる試み

緑の森博物館は、里山を環境教育や里山管理作業体験の場として平成7年の開館時から来館者に提供しています。また、周辺地域の小学校にも校外学習の一環で散策や稲作体験を授業に合わせて実施していました。令和元年、その価値をさらに高めるため、単発的な体験学習から学年をまたいだ一連の授業に置き換えることが提案されました。

伝えたいことの整理

➤ の企画では、緑の森博物館のもつストーリーに学校の思いを踏まえて児童
↳ に体験してもらいたいことが整理されました。

1

活用されているストーリー

狭山丘陵の里山の環境を
利用する地域の人々の暮らしには、
生活（農業）と結びついた、
文化や習俗、生活の知恵が
残されてきた。

3

児童に
体験してもらいたいこと

小学校の学区に住んでいた人々の多くは、古くから雑木林や田畑から恵みを得て生活を営んでいた。その恵みを得るまでの一連のながれを体験することで、狭山丘陵の里山を大事にしてきた地域の人々の思いに触れる。

2

学校側の思い

「ここが自分たちのふるさとで戻ってこられる場所があると感じてもらいたい。」



山田菜緒子

手すりを利用した解説板

【解説板を効果的にする更なる工夫】

より多様な来訪者に情報を届けるため、解説板には浮き出し文字や点字、QRコードが設置されています。QRコードから市のウェブサイトアクセスすると、解説板に関する資料を多言語で閲覧できるほか、音声での利用が可能になっています。さらに将来的には同サイトに「ストーリーマップ」を掲載し、解説板を巡るツアーの提供が目指されています。



山田菜緒子

解説板は読みやすく工夫されている

ストーリーを体験するには、里山の管理作業のながれに加えて、学校として使える授業数や学年による成長の差などから、体験内容が検討されました。

1年生/生活科

これまでの授業のベースは変えず集中力の短い一年生が楽しめるよう遊びと学びを織り交ぜて、雑木林に慣れ親しむ内容に変えた。

授業のめあて 四季を感じるために身近な自然とふれあう。

プロジェクトの目的 雑木林にコナラとクヌギが生えていることを知る。

プロジェクトの対象

4月:春の自然 7月:夏の自然
10月:秋の自然 1月:冬の自然

2年生/生活科

植樹に向けての植え替え作業を新たに入れてもらった。1コマだけのため、ガイドが学校へ出向き、目的と手順を丁寧かつ簡潔に示す。

授業のめあて 自然のことを伝え下級生をリードする気持ちを育む。

プロジェクトの目的 雑木林を維持するためにクヌギやコナラの苗を大事に育てる。

プロジェクトの対象

4月:春の自然 7月:夏の自然
2月:苗の植え替え作業

3年生/理科

5年生の稲作の授業に合わせて逆算し、3年生で落ち葉かきをする必要があり、新たに2コマ×2日間の授業を追加してもらう。

授業のめあて 虫の体の作りを知るために実物を捕まえて観察する。

プロジェクトの目的 落ち葉堆肥にするため、古くから行われてきた落ち葉かきの意味と方法を知る。

学校の授業

9月:虫の体のつくり

プロジェクトの対象

10月:下草刈り 11月:落ち葉かき

4年生/理科

堆肥ができていくまでを意識してもらうために、これまでの授業を堆肥ベースの観察に置き換えた。

授業のめあて 季節ごとの生きものの活動の違いを四季を通じて観察する。

プロジェクトの目的 落ち葉が堆肥になるのに関わる生きものを四季の観察を通して知る。

プロジェクトの対象

4月/7月/11月/1月:生きもの観察

5年生/総合的学習

これまでの授業に加え、昔ながらの里山の営みをより意識できるように、昔ながらの道具(クワ、田車、脱穀機など)や手法を使い、丁寧な解説を入れた。

授業のめあて 食の大切さを知るためにお米作りを体験する。

プロジェクトの目的 落ち葉堆肥や水などの恵みを地域ならではの稲作を通して理解する。

プロジェクトの対象

5月:田起こし・堆肥まき田植え
6月:宿泊学習にて薪の利用
7月:草取り①草取り②
10月:稲刈り脱穀
11月:炊飯試食

6年生/総合的学習

6年生は新たに2コマ入れ、一番集中力の必要な作業である伐採を行った。卒業直前に植樹を入れることで、里山への関わりが続くことを意識できるようにした。

プロジェクトの目的 伐採を通して、雑木林の利用と管理を知る。

プロジェクトの対象

1月:伐採薪割り 2月:植樹



教職員の方々からの共感と継続的な関わり

緑の森博物館の提示したストーリーと授業内容を理解していただくために、教職員向けの説明会が実施されました。この説明会によって教職員の活動への共感が見えたこと、また教職員の方が多地域から着任されることや定期的に入れ替わることも考えて、説明会を毎年実施する仕組みが作られました。

効果

体験の積み重ねが育てた、子どもたちの地域との関係

緑の森博物館と小学校の連携が始まって6年の月日が経ちました。1年生だった児童が初めて一連の体験を終えることができました。授業を受けた児童たちの成長過程を評価する指標は現段階ではありませんが、ストーリーを教材に活かした試みは、地域の里山を保全するための欠かせないプログラムへととなりました。プログラム開始以来、児童が友達や家族を連れて放課後や休日に里山に来て、管理作業の手伝いや各々の時間を過ごす光景が増えたことを受け、授業を受けた児童たちもストーリーの一部となってきていることがうかがえます。



ストーリーが移住促進の立役者

栃木県那須町
(ふるさと定住課)

観光地として全国的に有名な那須町ですが、移住者の受け入れにも力を入れています。その一環として、那須町ふるさと定住課が主催する移住体験ツアー「那須暮らしをリアルに体験できる2日間」が行われています。この中で地域のガイドが協力し、ストーリー集が活用されています。



那須のストーリーにふれるワークショップの様子

活用されているストーリー

那須への移住は、
那須の自然だけでなく、
その歴史に裏付けされた価値と
居心地の良さに身を置くことである。

ツアーの冒頭で、那須町の概要や支援制度が紹介されたあと、約2時間「那須の自然と楽しみ方・那須の魅力ストーリー」と題したワークショップが行われます。参加者が互いに交流し、打ち解け合いながらストーリーを知ることで、より地域への理解が深まり、その後の「食・自然・住」の体験により魅力を感じられるようになる効果がみられました。

ツアーは令和7年6月・11月・12月の計3回行われ、合わせて59名の参加がありました。参加者からは「那須がさらに好きになった。」や「移住の決心がついた。」との声が聞かれ、ストーリーを活用することへの効果が見られています。

このツアーが成功した背景には、何よりも主催者側の意識が変わったことがありました。これまでは「那須はどういうところ?」といった質問に対して、「自然が豊か」や「和牛や乳製品が美味しい」など、資源単体について答えるしかできませんでした。ストーリー集ができてからは、地域資源の背景や人との関わりを含めて言葉にして、その意味や価値まで伝えられるようになりました。



移住体験イベントのチラシ

参考資料

『雲仙温泉地区雲仙をもっと好きになるSTORY』一般社団法人 雲仙観光局
『雲仙市国見エリアをもっと好きになるSTORY』一般社団法人 雲仙観光局
『橋サンセットエリアをもっと好きになるSTORY』一般社団法人 雲仙観光局
『NASU INTERPRETATION's ACTION(那須を大好きになるストーリー集)』一般社団法人 那須町観光協会
『平久保半島 インタープリテーション全体計画』平久保半島自治協議会
『高尾ビジターセンター インタープリテーション全体計画』株式会社 自然教育研究センター
『カネバ緑の森博物館 インタープリテーション全体計画』株式会社 自然教育研究センター
『シアトルシティ公式ホームページ』シアトルシティ
<https://sdotblog.seattle.gov/2026/01/20/new-signs-share-seattle-waterfronts-story/>
『マンザナー国定史跡ホームページ』アメリカ国立公園局
<https://www.nps.gov/manz/index.htm>

取材協力

瀬戸正志(一般社団法人 雲仙観光局)
真山高士(NPO法人 那須高原自然学校/一般社団法人 那須町観光協会)
山崎和幸(栃木アウトドア事業振興会BERGTOAD)
山田菜緒子(金沢大学)
大堀健司(エコツアーふくみみ)

発行 令和8年3月
発行者 環境省九州地方環境事務所 霧島錦江湾国立公園管理事務所
請負業者:
編集 株式会社 自然教育研究センター
デザイン トーキョー・テnder・テーブル株式会社

